

音楽療法により社会性の向上が見られた筋強直性ジストロフィー患者の1例

～集団音楽療法に参加して～

河野 小雪紀¹⁾ 今村 優子¹⁾ 小林 祐貴¹⁾ 美原 淑子¹⁾ 美原 盤²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 音楽療法科

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 院長

[目的] 当院では神経難病患者に対する緩和ケアとして集団音楽療法を実施している。今回、集団音楽療法に参加し、社会性の向上が認められた筋強直性ジストロフィーの1例を経験したので報告する。

[音楽療法の構造] 神経難病患者を対象とした集団音楽療法は、病棟談話室で、週4回、1回60分間で実施、参加は患者自身の意思に任せ、いつでも入退室可能、参加人数0人のときもあれば10人ほど集まることもある。内容はリクエストを中心に音楽療法士がキーボードで演奏、歌唱している。

[症例] A氏は、40歳代男性、X年、歩行障害、上下肢遠位筋の筋力低下を主訴に当院を受診、筋強直性ジストロフィーと診断された。神経症状は徐々に進行、X+5年、補助呼吸導入目的で当院に初回入院、車椅子状態であった。声掛けには対してはいつも機嫌が悪そうな印象があった。しかし、カラオケ好きとのことで集団音楽療法には毎回参加していた。参加当初は、他の参加者にとっては馴染みの少ないアイドルソングばかりをリクエストをしたり、替え歌を歌うなど、自分勝手な行動が目立った。X+8年、レスパイトケア目的で定期的に入院するようになってからは、集団音楽療法の場面で他の参加者に合わせる態度が見られるようになり、他の参加者の年代に合わせた曲・ジャンルや、他の参加者が好きな曲をリクエストするようになり、アイドルソングのリクエストは参加がA氏のみのおきだけになった。

[研究方法] A氏には音楽療法をどのように感じているか、A氏の家族、他の患者、病棟スタッフには、A氏の音楽療法に対する関わりをどのように認識しているかインタビューした。なお、対象者へ本研究の趣旨、個人が特定されないように配慮することを口頭で説明し承諾を得た。

[結果] A氏は、セッションに参加しているときは幸せと感じており、「いろいろな人と知り合えた」ことをよろこんでいた。家族や他の患者、病棟スタッフは、A氏がセッションを楽しみ、みんなと交流できる時間だと感じていると認識していた。さらに、病棟

スタッフからは「以前は自分勝手だという印象があったけど、今は他の参加者と協調できるようになった」「音楽療法中心に、リハビリ時間の調整を希望するなど、入院生活のスケジュールを自ら立てており、入院生活のサイクルが適切に回っている」「普段の生活でも他の病室の患者さんと将棋をさすなど、付き合いがよくなった」と意見があった。

[考察] 集団音楽療法は、神経難病患者の精神的ケアのひとつとして、入院生活の楽しみ、生活リズムの構築に寄与している。筋強直性ジストロフィー患者は関心あることは積極的に行うが、他の考えは受容しにくい自己中心的な性格傾向があるとされている(2002, 森下)。集団音楽療法を通じて、A氏に他者へ気遣う姿が見られるようになったことは、患者の社会性の向上に対する音楽療法の有用性を示唆するものと思われる。